



Title	故永田理事長と松山教授を憶ふ
Author(s)	武内, 義雄
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 45-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88745
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

この一大人格者を失つたことは我校並に社會教化上の大損耗なるのみならず實に我國實業界の一大損失である噫々。

故永田理事長と松山教授を憶ふ

武 内 義 雄

今年懷德堂が永田理事長と松山教授とを失つたことは堂の爲め誠に痛惜すべきことである。永田翁が懷德堂記念會の理事長として盡力されたことや、松山教授が開堂以來の學事に骨を折られたことについては、別に述べられる方があらうから私は唯私の受た印象をのべて追慕の誠を表したい。

或る日私が故西村先生を松ヶ枝町の御宅に訪ねると、先生は『今日は朝から永田君が來られて懷德堂の事に就いて相談して歸られたが、懷德堂もごうにか眼鼻がついて來た。自分は懷德堂を再興して大阪人に聖人の教を傳へることを一生の仕事とするつもりであるが、この事業を與にすることの能る人は永田君より外にはない。其大阪實業界に於ける聲望といひ、其漢學に對する理解といひ、其老熟した人格といひ、ともに此事業を大成するに足る人だ』と激賞されて、其抱負を語られた。當時私は

未だ永田翁を知らぬことゝて、さして深くも此言を考へなかつたが、その後故先生の推舉によつて堂の講師となり、理事會等にも席末をけがして翁に親炙するに及んで、故先生の激賞が過當でないことを知るとともに、翁を尊敬せずに居られなく成つた。

懷德堂の重建は全く翁の努力にまつものであつた。翁は大阪の富豪紳士に説いて堂の爲めに基金をあつめられた、而して基金の未だ充分でなかつた頃は、いつも私財を投じて堂の事業を助けられた。一例をいへば毎年の初に堂の爲に出講せられた京都大學諸先生を東山佐阿彌に招して前年中の厚意を謝するを恒例として居つたが、これに要する費用はいつも翁の支出する所であつた、而して此種の出資は一年中を通算すれば可なりの額に上つたに相違ない、額の多寡は別問題として、此種の出資は寄附として公にされるものでもなく、自然他人から認められずに終るものである。私はかつて某富豪が數万坪の土地を寄附して學校の新設を助けたと聞いて其義氣に感じたが、後其人は此寄附によつて、隣接する私有地の價值を數倍に引き上げ得たと聞いて興をさました事がある。これ程打算的に計畫はされずとも美名を買ふ爲に金品を寄附する例は世間にもありふれて居るが、翁が懷德堂に對する出資の如き名利の打算を超越したものは稀れであらう。これは翁としては大した事でないが翁の人爲りと懷德堂に對する誠意との一端を窺ふに足ると思ふ。

私か翁に對する個人的感じは今述べることを差控ゐるが、翁は私を實際以上に評價してゐられた

様に思はれる、これには故西村先生の過當な推獎が原因してゐると思はれるが、兎も角も翁は私を買ひかぶつて居られた、而して私は此の知己の恩に報い得ない事を愧かしく思ふ。

私が初めて松山先生を知つたのは、先生が重建懷德堂の開堂式に大學首章を講せられた時であつた、この時先生は自分はこれまで廣島高等師範に奉職して來たが、先年大患に罹つて健康を害ねた爲め今少し閑職に就きたいと望んで居たところに懷德堂からの切なる依頼があつて喜び勇んで來たとの挨拶をせられた。私はその後も先年の大患が何であつたかを知らず又知らうともせず、ただ既に閑職を望んで來られた以上、進んで働かれることはなからうと思つて居た。勿論先生は大阪の活社會に飛躍される様な人ではなかつた、然し懷德堂の學事については頗る忠實に熱心であられた。而して理事者の大体が寧ろ見合せた方が宜しからうと考へた、日曜の講演や文科講義など。進んで開始されて、或はら講義を擔當せられたり、或は京阪の間を奔走して學者を招して出講を乞はれたりして倦むことを知られなかつた。而してそれが一年や半年ならばいざ知らず十年一日の如くつゞけられたといふのは敬服すべきでなからうか。

私は又時々先生が『禮記纂言』を講じられたのを傍聽した。講義は一寸拜聽した所では平板で耳を敬てる様な點もなかつたが、先生は此講義の爲めに孔穎達の正義を初めあらゆる註釋を獵涉して精審と思はれる部分を鈔録して居られたと聞いて、其努力の大なるに驚いた。又先生が『古今學變』を講せ

られたときも非常に骨を折られて東涯が引用した文章を一々原典にあたり出所を明かにして解釋を施されたが、或る時其欄外に琅邪代醉篇といふ書物が引用されてあつたので、此書物を見ようとせられたところ、懷德堂は勿論大阪圖書館にも之がなかつた。乃て先生は石濱學士を通じて泊園書院の藏本を借出して御調になつた。それが東涯の本文に引かれたのであれば、その勞もさることだと思ふが單に欄外の註記に引用した位で、こゝまで行届いた手数をかけられたといふのは學者の態度として實に尊敬すべきである。而して此處に細事をも忽にせられない先生の慎重な性格が現れて居る。先生は決して場當りや新奇を衒ふ事をされなかつたから、その講義は動もすれば平板に失することもあつたが、然し言々句句皆典据あり、之を實際に施して過のないものばかりであつた。先生は『古今學變』講述の手控を整理して公にされ度い御考へもあつた様だが、遂に實現されなかつたのは残念である。

先生が『古今學變』を講せられたとき、私は諸子の梗概を口述して講を助けたが、私が子思子の學を論するにあたり、梁の沈約の語に本いて禮記中の中庸表記緇衣防記の四篇を以て子思子の遺編と解釋し、宋明の學者は單に中庸のみによつて子思を論するが、中庸の中にも新舊の別があつて、その新しい部分よりは寧ろ表記以下三篇の方が古く、後世尤も賞讃されて居る中庸の哲學的な部分は秦の始皇の頃に敷衍されたものだと思ふ。先生は私のこの僻説を聞かれて、私の考を玩味せられ君の所謂中庸の原始的部分と表記以下三篇とはやゝ違つた趣か看取されるから君の論で進むなら(一)中庸の原始

的部分、(二)表記以下三篇、(三)中庸の傳衍された部分といふ三段に區分する方がよくはないかと注意された。其後私も亦考へ直して三段の區分を認める様に成つた。私の此の考は拙著老子原始の附録に記しておいたがこれには先生の注意が加はつて居る。先生は空言をさけて實踐を重んぜられる宋學者であつたが、考据にも注意せられて居つた事は此一事によつても推知せられる。

先生は藏書の乏しいのを堂の第一缺陷と考へられて、常に之を充實する方法を考へられて居た。而して其後靱山衣州西村碩園兩先生の遺書が懷德堂に收められ、書庫までが新築されて先生積年の念願は満足されたが、これに對する先生の努力は又大抵でなかつた。私は或る時先生の御室に通ると先生は碩園文庫を山積してカードを作つて居られた。私はかつて圖書館員として働いた経験もあつてカード作成の勞苦を知つて居る。而して先生が自ら進んで此勞役に従はれたことは一面繁雜な事務の一部を助ける御考へと、新たに入つた書物を一日も早く整理したい御考からであつたに相違ない。而して此等の書物は今整然と新築書庫の内に排列されて居るが、先生は既に此世の人でない。曩に碩園衣州兩先生に別れた書物は今又先生を失つて其不遇をかこつて居るでなからうか。